

豊かな自然と歴史のまち 熊野

くまの 熊野市長(三重県) かわかみ かんじ 河上敢二
Kanji Kawakami



豊かな自然のまち

熊野市は、三重県南部に位置し、北西部は、標高500mを超える山々が縦横に連なり、奈良県および尾鷲市に接し、東南部は黒潮おどる熊野灘に面してリアス式海岸と白砂青松の変化に富んだ景観に恵まれています。また南西部は和歌山県、奈良県と接する人口約1万8000人(平成28年6月現在)のまちで、平成17年11月に熊野市と紀和町が合併し、新「熊野市」が誕生しました。

産業は、温暖多雨な気候と市の面積の88%が山林という地形から、木材生産地として知られ、農業では、温暖な気候にはぐくまれたみかんの栽培が盛んで、この地域の特産品となっています。また、硯石や基石に代表される「那智黒石」も熊野市が唯一の原産地です。



世界遺産熊野古道「松本峠」

熊野灘のサンマは海の幸の象徴であり、「さんま寿司」は熊野が発祥の地です。天然の良港と漁場に恵まれ、定置網漁業や敷網漁業なども盛んです。

平成16年7月に世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」の熊野古道、日本最古の神社「花の窟」や豊富な湯量が自慢の湯ノ口温泉や瀧流荘、先人の米作りに対する意志を後世につなぐ1340枚の丸山千枚田、藤堂高虎が築城した赤木城跡、柱状節理の景勝地としても有名な楯ヶ崎、無数の洞窟が階段状に並んだ奇岩奇勝で知られる鬼ヶ城、美しい砂浜と透き通った遠浅の海が自慢の新鹿・大泊海水浴場など海の自然も満ち溢れています。

観光・スポーツによる集客交流

長い間陸の孤島と呼ばれていたこの地域でしたが、本市の悲願であった高速道路が

熊野大泊ICまで開通したことで名古屋市周辺まで、約2時間50分と私が平成10年に市長に就任したころには、名古屋まで4時間近くかかっていたことを思うと非常に時間と距離が短くなりました。また、日帰り商圏内人口が680万人とこれまでの95万人から7倍以上になり観光資源などを



日本の棚田百選に選ばれた「丸山千枚田」

生かした集客に最大のチャンスが訪れます。

本市には、世界遺産熊野古道があり峠道など三重県内では最も多くの13の世界遺産があり年間約115万人の観光客の方に訪れていただいています。

そのほか、藤堂高虎が築城した天空の城として注目を集めている赤木城跡や棚田百選にも認定され日本ユネスコ協会連盟の未来遺産にも登録されている丸山千枚田、中国から徐福が上陸したと言われる徐福の宮、神武天皇が東征で上陸した楯ヶ崎などの数多くの観光資源があります。しかし、まだ十分に生かされていない市内の隠れた絶景、秘境を発掘し、観光集客を市内全



「くまのスタジアム」でのソフトボール全国大会開会式の様子

であるとの思いもあり整備し、今では年間を通じてさまざまな大会や合宿で使用されています。

本市は、「ソフトボールのメッカ熊野市」として、日本全国に知れ渡っており「熊野で合宿すれば強くなる」と注目を集めています。

東京オリンピック

域において一層拡大し、より大きな経済的効果の実現を目指しているところですが、大会やスポーツによる集客については、大会や合宿に伴う宿泊数は平成12年度には年間6000人でしたが、平成26年度には比較して約5倍の年間3万人もの宿泊をいただくことができ非常に大きな経済効果をもたらしています。

特に私が市長に就任したところに整備した「くまのスタジアム」は両翼100mの野球場として三重県下でもトップクラスの施設で、野球・ソフトボール関係者を招くには非常に大きな効果をもたらしています。

私も野球少年であったことから小規模な自治体でも施設の充実、今後必ず必要

ク・パラリンピックでは、ぜひ競技種目に選ばれるよう期待しています。

特産物等の輸出

本市では、熊野地鶏や南紀みかん、新姫高菜が三重ブランドなどに認定されており県内外での認知度も向上し熊野ブランドが引き合いの強い商材として成長しているところですが、

去る5月26日、27日に開催された伊勢志摩サミットの際には、熊野地鶏や南紀みかんが首脳の食事の食材として選ばれ大いにPRできたところですが、

また、サミット終了後にはそれぞれ波及効果としての注文が増加するなど改めて首脳会議の影響を感じているところですが、私も市長になる前に農林水産省時代にイタリア大使館勤務でナポリサミットを経験していますが、厳選された食材が一流のシェフに使われることでのPR効果は絶大であると感じています。

特産物等の販路拡大では、平成26年度から京都府木津川市の皆さんに応援していただき「くまの特産品広場」を開設しています。まだ、毎月3回土曜日の開設で試行錯誤の段階ですが、本市の若手農家の皆さんが都会の消費者の方と直接対話をする中で、ニーズの把握や自分たちの農産物の良さを伝えることが大きな目的です。若手農家の皆さんからは消費者の生の声が聞けて次の



京都府木津川市で開設している「くまの特産品広場」

生産の参考になる。品揃えに厳しい意見もあるがこのような経験がやる気につながるのと前向きな姿勢が見受けられ市としても積極的に応援していきたいと考えています。

このような取り組みについては、農林水産省当時に日本の農業を幅広く見ることができたことなどが1つのヒントにもなっており、担い手の確保や新規就農者確保に向けた取り組みにもつながることになると考えています。

いずれにしても市の発展については、満塁ホームランはなかなか打てるものではないと思いますが、1本ずつ着実なヒットを積み重ねて市政運営を推進してまいります。